

と牛肉の料理で、ちょうどブタを売る前と同じようなことをされて、顔は丸々していた。

八月五日、乗船（信濃丸）このときに「遺髪袋」がソ連兵に見つかり、日本に持ち帰ることあいならんということになり、ナホトカで茶毘にふす前、戦友各位の協力を得て、一人当たり二〜三人の割合で死亡年月日他を覚えてもらい、焼却したので承諾が出た。乗船すぐ日本の海員さんに紙と鉛筆を借りて、戦友の皆さんにも忘れないうちに書き込んでもらい、生きて帰る者の務めとして最後までキチンとなし遂げた。

八月七日舞鶴港上陸、引揚援護局の係官に、上記紙片を当時の軍隊言葉で、確度甲として届けた。その数、実に七十数人だった。舞鶴平栈橋上陸後、赤痢患者が発生したので、全員消毒、その他検査があつて、八月十二日、帰宅のため、舞鶴引揚援護局を出発、同日、帰宅した。

ソ連参戦

島根県 八幡垣 正 雄

時あたかも、ソ連がドイツとの戦いで勝利を収め、日本も既に敗戦間近というとき、その勢いを日本に向け、二十年八月九日、日本に参戦。我が部隊も南下作戦を開始。部隊全員がトラックに分乗し、兵舎及び各施設を爆破して出発するも、悪路にて前進不可能となり、車を乗り捨て行軍によってある駅に到達。その駅で南進する貨物列車兵隊専用に乗って出発する。

途中の鉄道沿いにもソ連の攻撃による被害が続出。その被害地附近で日本の婦人が足に傷を負い、「兵隊さん、助けて！」と絶叫していたが、いかんともなす術なし。恐らくその婦人は死んだであろうと今も心が痛む。当時是在満日本人婦女子の悲惨な状況を目にすることもしばしばあった。

その日の夕暮れ近く列車が牡丹江河の鉄橋にさしか

かったとき、突如として敵戦車砲の砲撃を受け、列車はその場に急停車し、大隊砲等で応戦。我々丸腰の衛生兵は下車し、その夜は七星の山中で野宿する。翌日目覚めると、被服は夜露でぬれ、携帯用の乾パンも溶けるほどの露であった。その日から山中を歩くこと四日間、夜はほとんど野宿であった。八月十七日の午後、横道河子という町に到着し、初めて終戦を知らされる。これで兵隊も終わり、日本に帰国できると思うと体中の力が抜け呆然とたたずむ。

しかしソ連軍に武装解除され自由になったとの喜びも束の間、横道河子から行軍して拉古に集結、拉古にて作業大隊が編成され、千人単位の編成となる。ソ連から編成して来た列車でいよいよ出発。貨車の中は二段式の板でつくった粗末なものであり、トイレも空き缶があるのみの屈辱的なものであった。

国境駅綏芬河までは比較的近距离で、昭和二十年九月二日、貨車輸送によって沿海州カロリ地区の原野に下車。ここがソ連抑留の第一歩で、その後四年半に及ぶ幾多苦難のシベリア強制労働と続く。シベリア抑留記を断

片的に述べてみる。

最初の抑留地カロリー収容所

私たち捕虜は食糧、炊事用の鍋釜を交替で担ぎ、目的地に向かって出発、この光景を見るとちょうど敗残兵が退却して山中に逃げるようであった。ふと我に返って見ると、まさにそのとおりであった。これがかつての関東軍の精鋭の姿であったのである。

歩くこと二時間余りで目的地に到着、この地に住むのも家もなく、また天幕等も携行していないので、私たちが新しく建てなければならなかった。半地下式に土を掘り、山の立ち木を切り、丸太小屋を建て、壁は木の皮や草などで周りを囲い、中に炉を切り、夜は交替で火を燃やして寝た。この地区での作業は、長柄の刃渡り六十センチの鎌で、乾草用の草刈りであった。この地区での労働は十月の終わりごろまで続き、それから四か年余りを転々と収容所も仕事も変わった。移動の都度ソ連兵は東京ダモイ（日本へ帰る）と偽り移動させた。

食事、環境衛生

食事は一日三百グラムの黒パンに、三百グラムの穀物

(小麦、コウリヤン、豆類、実ソバ)等で家畜の食べるようなものであった。

シベリアは四季がなく、短い春と夏、酷寒の冬である。冬は零下三十五度までは野外作業に従事した。凍傷にかかり、手や足の指を切り落としたりした者もいた。

飲用水は硬質の地下水または川の水で、よく下痢をおこした。入ソ当初は池沼の水を飲んで、アミーバ赤痢が流行し多くの死者が出た。また栄養失調による死者も多く、過寒のシベリアに抑留された軍人、軍属等は五十七万五千人で、抑留中に死亡した者は六万三千人と聞いている。風呂は一年に二〜三回程度で、それもシャワー式か、石やれんがを焼いて水をかける蒸し風呂式のものであった。このように環境、衛生面は非常に悪く、シラミ、ノミ、南京虫等、特にシラミは多く、毎夜の日課はシラミ取りであった。このようにシラミ等に悩まされ、栄養不足の上に栄養を掠取され、ダブルパンチを食ったものである。

栄養失調、ビタミン不足による鳥目

昭和二十二年の秋ころ、夜になると急に目が見えなく

なり、針の目つぎの穴だけの光が見えるだけで、夜になると不便で、特に便所に行くのが大変であった。鳥目はビタミン不足によるのが原因であるので、肝油を飲むとよいとのことであったが、肝油などなく、別に治療の方法もなく、昼間の作業には影響がないので、他の者から見ると怠けているようであった。

ちょうどそのころ、コルホーズで馬鈴薯掘りの作業があったので、希望して行き、昼はいい掘り、夜は普通の食事以外に何もたいて食べて、この地で十日余りの作業であったが、大分日もよくなり、一か月くらいで元のように治癒した。

労働

抑留中の地区名は、カロリー地区、ウオロシロフ、ウスリースク、ウラジオストック、スーチャン(日本軍がシベリア出兵当時に駐留していた地区)、最後がハバロフスクであった。作業内容は、草刈り、船の修理、道路補修、建築工事、炭坑夫、赤れんがづくり、貨車の積みおろし作業、農場作業等多種多様であり、作業量はノルマ作業(個人またはグループに割当てられた労働基準

量)であり、労働条件は厳しかったのである。

復員(帰国)

昭和二十五年四月二十日、ナホトカ港より貨物船信濃丸に乗船、ナホトカ港を午後四時ごろ出港、二十二日懐かしい故国の島々が見えたとき、ただ涙が出るばかりであった。私はシベリアで帰国二か月前より栄養失調により入院していたので、舞鶴上陸後も国立舞鶴病院に入院し、数日してから国立松江病院に転院加療し、昭和二十七年十月に退院、郷里に帰ったのは実に八年ぶり、二十八歳のときであり、二十代の青春を酷寒のシベリアで、苦難の道を歩んだのである。

また帰国途中、船内での日本からのラジオ放送によると、ソ連当局は今回の送還でソ連からの送還を終了すると、モスクワ放送が伝えていると放送していた。送還の再開は昭和二十七年ころから始まり、三十一年ころに終わったようである。もし私が第一次の最終船で帰国できなかったら、おそらくシベリアの土と化し、現在のような平和で発展した国を見ることができなかつたと思うと、あの酷寒の地で凍土に骨を埋めた六万三千余人の同

胞に対して黙禱をせずにはいられない日々である。

帰国後四十年も過ぎた今日、いまだに年に一、二回シベリア抑留中の夢を見るのである。いかに五か年間のシベリア抑留生活がつかつたかを物語る。ダモイ(帰国)の言葉を信じ、抵抗もなく連行されて以来、苦しみ、諦め、そしてなお生きようとした悲しいまでの人間の姿、望郷の念に支えられて生き抜いた困苦欠乏の日々を私は終生忘れないであらう。

私の戦後

栃木県 小野寺 進

シベリアへ

私は九站で終戦を迎え、吉林にて武装解除され、哈爾濱、満州里經由で九月十九日ついにシベリアに入る。何日かして最初に着いた所が海が見え、日本海が見えたと思ったら何とバイカル湖だと聞いてまたびっくりである。一時間くらい停車し飯盒炊飯をし、そこにはすでに